

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 29 年 6 月 1 日現在

機関番号：34315

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2015～2016

課題番号：15K21496

研究課題名(和文)戦後日本の男性不妊と男性性に関する歴史研究

研究課題名(英文)A Historical Study on Male Infertility and Masculinity in Post-War Japan

研究代表者

由井 秀樹(Yui, Hideki)

立命館大学・衣笠総合研究機構・研究員

研究者番号：40734984

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,000,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、戦後日本において男性不妊がどのように意味づけられてきたのかを以下の二点から検証した。一点目は、1950年代から2010年代までの『読売新聞』の身の上相談「人生案内」を、二点目は政策文書で語られる男性不妊について分析した。結果、今後のジェンダー研究の進展に資する点として、少子化対策言説において不妊治療の重要性が強調されるなかで男性にも不妊原因が存在することが語られ、生殖する性としての自覚を男性が持つことで、国家による女性身体の管理が男性を介在させることで強化されうる点を示された。

研究成果の概要(英文)：This study analyzes the interpretation of male infertility in post-war Japan. To clarify the points, the human relations column of the Yomiuri newspaper from the 1950s to the 2010s and policy documents referring to male infertility were examined. The results suggest the following point. Control of women's bodies by the country is strengthened through men's awareness of their reproductive responsibilities, which occurs through Japan's teachings that identify male infertility as a countermeasure to declining birthrates. This point seems to link to progress in gender studies.

研究分野：ジェンダー研究

キーワード：男性不妊 身体管理 妊娠・出産役割

1. 研究開始当初の背景

従来のジェンダー研究では、セクシュアリティと生殖をめぐる問題は、女性の問題として捉えられてきており、この問題が男性との関連ではほとんど議論されてこなかった。もっとも、セクシュアリティについては、性欲処理方法の問題として男性にも焦点化されてきたことには留意が必要である。しかし、ここに生殖はほとんど関係づけられてこなかった。

2. 研究の目的

男性と生殖をめぐる問題が顕在化するのが、男性側に不妊原因が存在することが明らかになった場合である。そこで本研究の目的を、戦後日本において、男性不妊がどのように意味づけられてきたのか明らかにすること、とした。

3. 研究の方法

上記の目的を、以下の二点から検証した。
(1)一般大衆誌を広く渉猟しながら、最終的に『読売新聞』に掲載される身の上相談記事である「人生案内」を、1950年から2015年にかけて分析した。その際、不妊を含む性の悩みに関する相談事例をピックアップして検討し、その中でさらに男性不妊が問題化されているケースを中心に検証した。合わせて、『戦後家族社会学文献選集』(渡辺秀樹・池岡義孝監修、日本図書センター)を参照しながら、戦後の家族論と「人生案内」における語りとの関係を検証した。

(2)政策文書で語られる不妊について分析した。特に1990年代以降の少子化対策の文脈で語られる不妊をめぐる言説に着目した。

4. 研究成果

(1)「人生案内」については、特に不妊男性を夫に持つ妻の語りを中心に検証した。結果、以下の点が明らかになった。

戦後一貫して妊娠・出産役割を内面化するノ男性中心社会から内面化させられる女性にとって、妊娠・出産、そして子育ては自身の自己実現の手段として位置づけられており、それをさまたげるものとして、男性不妊が意味づけられてきた。つまり、過度の単純化は控えるべきだが、原因が男女どちらに存在しようとも、不妊が女性の問題として構成される社会の価値観に女性自身も強く影響を受けてきたといえる。

男性側に不妊原因があるにも関わらず、治療対象が女性になり、女性が身体的な侵襲を伴う処置をほどこされ、そのことが男女双方について葛藤経験をもたらす。つまり、女性が不公平感を感じる一方で、男性は自身に原因があって妻に辛い不妊治療を受けさせるという罪悪感を覚える語りが見られた。

子の有無や不妊治療に対する男女の温度差、つまり、夫の不妊治療に対する消極的な姿勢が女性の葛藤経験につながる。不妊原因がどちらに存在しようとも、治療に対する男女の温度差は存在するが、とりわけ男性不妊の場合には、「原因が自分にあるにも関わらず消極的」だというように、女性の葛藤経験の理由付けに用いられることがあった。

上記、が示すことは逆に、男性が不妊治療に積極的であったとすると、女性は身体侵襲を伴う処置を引き受けなければならない、つまり、実は不妊治療に消極的な男性の妻は身体侵襲を伴う処置を回避できる可能性がある点を示唆する。

上記に関連して、男性が治療に積極的になれない点は、従来指摘されてきた「男のプライド」、「男性性の喪失」を恐れる、という観点よりは、単純に検査、治療にともなう恥辱経験を恐れる、あるいは、女性ほどではないにしても精巣の切開などで男性にも侵襲性を伴う処置が施されることがあるので、それを恐れることが要因として示唆された。

1948年から日本にも導入された提供精液を使用する人工授精＝非配偶者間人工授精をめぐる、夫婦の温度差が存在する相談事例がみられた。それには、妻の方が積極的なケースと夫のほうが積極的なケースがあった。妻が積極的なケースは妊娠・出産役割の内面化が強く関わっており、夫が積極的なケースは、夫が自身の不妊を隠蔽しようとする意図が働くという従来の指摘と親和的である。

1990年代までは、性交ができないこと(インポテンツ)の悩みと、生殖ができないことの悩みが混在して語られていた。従来、生殖ができない男性は自身がインポテンツであると誤解されることを恐れる、という見解が提示されてきた、つまり、両者が分離して捉えられてきたのだが、インポテンツと生殖不能は重なることもあり、その点を見逃してはならないことが示唆された。

上記と関連して、1950、60年代の悩みへの回答では、生殖ができないことよりも、ことさらに性交ができないことが重視されており、性交ができないがために離婚を勧めるような語りが見られた。これは、当時の「人生案内」の回答が強く影響を受けていた、当時の家族論が、戦後の「民主的」な「近代家族」においては、子どもの有無よりも、夫婦の愛情、そして愛情確認の手段である性交を重視していたことによると推察できる。

派生して明らかになったことであるが、従来、戦前期の現象として語られていた、生殖補助技術を使用せずに、つまり、性交を通し

て妻以外の第三者の女性に出産させ、子を引き取るという行為が、1970年代に至るまで「人生案内」上で散発的に語られていたことが明らかになった。こうした事例から、従来代理出産の問題点として語られる加害被害関係、すなわち、不妊夫婦が多くは低所得者である代理懐胎者を収奪する、という構図に対し、夫と第三者女性との性交を許容させられる妻にも被害者性が発生しており、いわば二重の被害者性が存在することを指摘した。

(2)政策文書の分析では、以下の点が示された。

戦後、家族計画関連の政策に象徴されるように、人口を統制するために女性身体が管理対象化されてきた。しかし、近年の少子化の問題化に伴い、不妊治療の重要性、あるいは、不妊予防の重要性が説かれ、その文脈で男性にも不妊原因が存在することが、政策文書のみならず、一般向け啓発文書、教材などでも語られるようになった。

上記に関連して派生的に明らかになったことであるが、政策文書においても2010年代になって語られるようになった「卵子の老化」言説に関連することとして、高齢出産による「染色体異常」の発生可能性が問題化されている。このことは、1970年代以降、徐々に人口の質が優生思想批判とともに表立って語られなくなっていったといえども、近年に至るまで問題化され続けている点を示している。

(3)上記の(1)、(2)から、今後のジェンダー研究の進展に示唆をあたえる点が得られた。すなわち、従来、男性不妊すらも、妊娠・出産役割を半ば強制されてきた女性の問題として構成されていたこと、つまり、男性が生殖に無関心であったことの問題点、そして、妊娠・出産役割を女性に半ば強制するような政策、つまり、女性の身体管理の問題点が指摘されてきた。しかしながら、少子化対策に動員される言説群、および不妊治療産業の興隆などを経て、男性不妊が問題化され、その結果、男性が生殖する性としての自覚を得ることで、国家による直接的な女性身体管理に、国家による男性を介した間接的な女性身体管理が加えられ、管理がより強まる可能性が明らかになった。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 2件)

由井秀樹、戦後日本の不妊男性に対するまなざし 不妊男性の妻は自身の経験をどのように意味づけてきたか?、インク

ループ社会研究、査読なし、No16、2017、pp.112-134

http://r-cube.ritsumei.ac.jp/bitstream/10367/8101/2/sis_16_yui3.pdf

由井秀樹、妊娠出産に関する知識と少子化対策における人口の質、インクループ社会研究、査読なし、No16、2017、pp.59-79

http://r-cube.ritsumei.ac.jp/bitstream/10367/8096/2/sis_16_yui2.pdf

〔学会発表〕(計 5件)

Hideki Yui, "Teaching the 'Correct' Way to Marry and Reproduce: The Government's Attempt to Birth Rate in Japan," UK-Japan Seminar on the Politics and Practices of 'Low-Fertility and Ageing Population' in Post-War Japan 28 January 2017, Manchester University(マンチェスター・イギリス)

由井秀樹、戦後日本の代理懐胎 読売新聞「人生案内」の分析(1949-1975)、第28回日本生命倫理学会年次大会、2016年12月4日、大阪大学吹田キャンパス(大阪府・吹田市)

由井秀樹、戦後日本の男性と生殖能力に関する歴史研究、2016年度立命館大学人間科学研究所総会、2016年12月3日、立命館大学大阪茨木キャンパス(大阪府・茨木市)

由井秀樹、戦後日本の身上相談にみる不妊事例、日本家族社会学会第26回大会、2016年9月11日、早稲田大学戸山キャンパス(東京都・新宿区)

由井秀樹、戦後の「家族」と不妊男性、健康と医療をめぐる人文社会科学研究会、2015年8月2日、立命館大学衣笠キャンパス(京都府・京都市)

〔図書〕(計 1件)

由井秀樹・安藤藍・金森京子・北島加奈子・木村尚子・小嶋理恵子・笹谷絵里・瀧川由美子・利光恵子・伏見裕子・松島京・吉田一史美、北樹出版、少子化社会と妊娠・出産・子育て、2017、153(1-14、77-89)

〔産業財産権〕

出願状況(計 0 件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

取得状況(計 0 件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕

(1)研究成果の公表も兼ねて、さらなる議論の発展を目指し、立命館大学人間科学研究所「家族形成をめぐる対人援助プロジェクト」との共催で、2017年1月22日にシンポジウム「男性と生殖、セクシュアリティ」を立命館大学朱雀キャンパスで開催した。内容は以下の通りである。

瀧川由美子氏(醍醐渡辺クリニック)「不妊治療の現場から 男性不妊」

竹家一美氏(お茶の水女子大学大学院)「男性にとっての不妊治療 泌尿器科を受診した夫の語りから」

倉橋耕平氏(立命館大学)「男性不妊と男性性 『古い』という視点を読む」

由井秀樹「戦後日本の不妊弾性に対するまなざし 不妊男性の妻は自身の経験をどのように意味づけてきたか？」

澁谷知美氏(東京経済大学)「検査される男性身体史 1930年代の学校と軍隊でのM検を中心に」

コメント(中村正氏[立命館大学]、永田夏来氏[兵庫教育大学])

このシンポジウムの記録は、制作費の一部に本研究費が充当された『インクルーシブ社会研究16号 生殖と人口政策、ジェンダー』立命館大学人間科学研究所発行、2017年、<http://www.ritsumeihuman.com/publications/read/id/125>)に掲載されている。

(2)上記『少子化社会と妊娠・出産・子育て』(北樹出版、2017年)は、初学者や一般の方向けの書籍であり、研究成果の社会への還元も意図している。

6. 研究組織

(1)研究代表者

由井 秀樹 (YUI,Hideki)
立命館大学・衣笠総合研究機構・研究員
研究者番号：40734984

(2)研究分担者

()

研究者番号：

(3)連携研究者

()

研究者番号：

(4)研究協力者

()